

盛岡弁の研究(四)

一、伝統的な方言の喪失—その理由

現代の岩手の中学生や高校生に、たとえば「そう」「言う」「ばぐる」「交換する」「ではる」「出る」「かまる」「匂う」「うるがす」「ひたして水分を吸収させる」「こちよがす」「くすぐる」「しよす」「はずかしい」「つらつけない」「厚かましい」などといった言葉の意味を聞いてもほとんどわからない。これらの言葉は六十代以降の世代の(昭和二十年以前の生まれ)盛岡の人達がかつて使っていた日常語である。こうした現象は、岩手に限らず、全国各地に共通に見られる。この六十年程の間に私達の話し、聞く日本語―「伝統的な方言」(昭和三十年頃まで支配的であった方言、そして現在の六十代、七十代の人々が保持している方言をここではそう呼んでおく)は著しく衰退・消滅し、共通語化が進んでいるのである。それは「革命」という言葉がふさわしいほどの急激な言葉の変化であり、日本語の歴史の中で、特筆すべき「大事件」といつてよいほどのものである。一体、正確にはいつ頃から、何が原因でこれ程大きく変化したのであろうか。

その時期として、昭和三十年代の中頃、日本の高度成長期が転換期になっていると考えられる。急激な変化の理由として、第一に敗戦後、新しい、民主的な憲法によって、日本人の価値観は大きく変化し、神格化

された天皇制と「国体」、それを支えていた家長制が崩壊したことが挙げられよう。敗戦後、日本はしばらくの間は、戦前の価値観を強く残しつつも、大勢としてアメリカ流の民主主義の社会となった。また、それまで敵国語として排除していた英語や、欧米の文化が入り込み、翻訳されないままの片仮名外来語がとうとうたる勢いで浸透してきた。(特に近年のグローバルゼーションの流れは、世界の一体化、アメリカ流の自由主義経済の価値観を押し勧め、ややもすれば固有の文化、伝統的、地域的なものを置き去りにする傾向が強い。)これらのことが伝統的な方言が衰退しつつある理由の一つであろう。

第二の理由として、それ以上に大きいのは機械文明の発達に伴う生活の変化である。敗戦後の日本人の暮らしは貧しく、戦前と似たような生活を人々は営んでいた。ところが昭和三十年代に入ると、「もはや戦後ではない」という言葉が流行し、「神武景気」といわれる好景気(昭和三十一年)や国民所得倍増計画(昭和三十五年)などによって、日本経済はめざましい復興をとげる。電気掃除機、洗濯機、冷蔵庫が行きわたり、火力としてはガス、暖房として灯油(ストーブ)などが普及し、自家用の乗用車をもつのが一般的になってきた。これらの「文明の利器」によってもたらされる「快適な文化生活」はそれまでの、「自然的」、「原始的」

黒澤 勉

(岩手医科大学 教養部 文学)

ともいえる生活様式を一変させてしまった。

たとえば、以前はいろりや、かまど、薪ストーブなどで暖を取ったり、料理を煮炊きしたり、焼いたりしていた。そこに電気釜やプロパンガスや都市ガスによる炊飯、調理が普及し、石油ストーブ、電気ストーブ、スチームなどの暖房機器が普及した。その結果として、以前のような、マッチで火をつけ、薪を燃やす、それが煙る、火力を調整する、などという労力は不要となった。伝統的な方言として存在していた「たぐ」（焚く）「もやす」「いぶす」「いぶる」「ゆぶてえ」（けむい）「ひぼど」（いろり）「かまど」などという言葉が失われたのは、暖房、熱の取り方、調理の手段が全く変わったためである。「かまど」や「ひぼど」がなくなり「ゆぶる」こともなくなったら、それを表わす言葉が消失するのも当然である。

機械文明の浸透による生活様式の変化は、これからも急速なスピードで進み、あらたな文明の機器が作られ、生活はますます便利に、快適になつていくであろう。と同時に、それに対応した言葉が作られ、広がり、それまで使っていた言葉が失われていくに違いない。生活様式の変化の速さは、同時に言葉の変化の速さに対応すると思われる。

伝統的な方言が衰退した第三の理由は、テレビの普及である。昭和三十三年の皇太子ご成婚ブームは、テレビ普及の引き金となり、昭和三十三年の東京オリンピックによって一つの到達点に達した。白黒テレビからカラーテレビの時代となり、今や家庭に数台のテレビがある時代である。ラジオの普及も標準語の普及、一般化に大きな影響を及ぼしているが、テレビの影響はそれ以上に大きかった。一人一人がテレビを楽しみ、家庭内の対話が乏しくなり、多くの家庭では家族間での会話よりテレビを見る時間の方が長くなっている。家族全員がそれぞれテレビから流れる標準語の音声に耳を傾けて生活する、というようになっていく。テレビが私達の話す言葉に大きな影響を及ぼし、土着の方言の力はますます弱まっているのである。

さらにまた、第四の理由として、核家族化が進み、伝統的な方言の伝達者である祖父母と生活を共にする家庭が少なくなったことも挙げられよう。親は外に出て働き、祖父母がいけないということになれば、家族間の世代継承は薄れがちになるのも当然である。また、急激な文明生活の進歩は、古い世代の智慧を受け継ごうという意識よりも、新しく作られた機械や文化的な生活への適応、関心をもたらず。伝統的な方言など時代遅れの過去のものと考え、これを軽視するのは、これまた自然なことだともいえよう。

以上、伝統的な方言が衰退し、滅びつつある現状と、その背景をまとめてみた。一言でいえば方言の衰退―その反面、標準語の普及、片仮名外来語や英語の浸透―は日本が一体化し、世界がグローバル化して方言を昔のままに、完全に復活し、日常の言葉として再び生命を与えようとしても、それは困難であろう。話し言葉は、特定の個人の力をもってこれを変革することができない。たとえ政府の政策のようなものであっても―いわゆる国語政策として提言されることがあっても、その及ぼす範囲、影響力は話し言葉という巨大な「言葉の海」の中であって、きわめて小さいものにとどまらざるをえないのではなからうか。

それでは、方言など単なる過去の遺物、時代遅れの、つまらないもの、価値のないものとして捨ててしまつてよいものであろうか。

二、伝統的な方言を学び活用する

方言とは日常の、人々との交流の中で自然に身につけていく言葉であつて、一般的にいえば外国語のように努力して、学ぶものではない。しかし、方言に接することも少なくなっている現代において、学習の素材として学び、あるいは活用することが望ましい、と私は考える。その理由として次のようなことが挙げられる。

第一に、伝統的な方言は、子供達からすれば祖父母の世代の言葉であ

り、その言葉を通して子供達に祖父母の生活体験や文化、価値観を理解し、時にはこれを伝えることが出来るからである。祖父母の体験を伝えるとは、ごく近い過去の生活や歴史を次の世代に継承していくことである。柳田国男の言葉を借りれば、「常民の文化」を伝える媒介として、方言は役立つはずである。

第二に、伝統的な方言を通して、日本語について、深く、豊かな理解が得られる、ということである。方言は、古語や標準語と深く結びついている。古語や標準語が、変化して方言となつていく。方言を通して言葉が伝播するなかで変化していくプロセスを確かめることができる。つまり、方言を知ることによって、日本語の歴史、発音、文法、語彙等について、広く、深い、理解が得られるのである。

しかし、私のみるところ、これまでの方言研究はややもすれば方言語彙の収集が中心となつており、その変化のプロセスが研究されていないようにみえる。しかし方言こそ、もっと分析して、その語源や音声、意味の変化の過程をつきとめるべき興味深い素材ではなからうか。

第三に、その土地を訪れる人々に、伝統的な方言を伝えることによつて、地域文化を伝える観光資源的な役割も期待できる。京都といえは「おおきに」という言葉が有名であるが、実際にはこの言葉はあまり使われなくなつていくという。かつて使われていた言葉が京都弁として、土地の個性を表わす言葉として知られているのである。浅田次郎の『壬生義士伝』という小説が話題になり、映画化もされた。主人公の吉村貫一郎の語る「おもさげながんす」（申しわけございません）「おいしえつてくなんしえ」（お許し下さい）などという盛岡弁も一つの魅力となつていく。異質の風土や文化、伝統に出会うことに旅をする喜びや発見がある。日本国中、どこもかしこも同じ言葉になつたら旅の楽しさも半減してしまうであろう。

第四に、伝統的な盛岡弁は文芸創作の言葉ともなりうる。現に石川啄木や宮沢賢治、特に賢治の作品には伝統的な方言がしばしば登場してお

り、作品に一つの色どり、味わいを添えている。啄木や賢治の作品においては、今、生きている生活語として方言が使われている。しかし、現在、私達が伝統的な方言を、俳句や短歌、詩歌に使うのは、過去の暮らしや心を再現する意味合いが強くなつていく。生活語としての方言が失われつつあるからである。その失われつつある方言を、昔の暮らしや心に思いをはせつつ文芸創作の手法とするのも、意味あることだと思われる。（それは時代劇が武士言葉で語られるのにも似ている）

第五に、意識的、意図的に伝統的な方言で挨拶したり、その土地の言葉を使うことによって、会話に親しみや面白さ、変化が出てくる。方言は一般に擬声語や擬態語が豊富で、表現力が豊かであるから、意図的にそうした言葉を使うことによって会話が弾み、楽しくなる効果もある。近年、方言が「笑いをとる」ため、「親しさをます」「話を面白くする」ための方法として使われるようになっていく。これも、方言使用の上から、かつてなかった興味深い現象であり、それはそれとして評価できることではなからうか。

以上のように考えてみると、過去において、自然な生活語であつた方言は、今、人々の記憶の中に「眠れる文化財」として、意識的な学習、その利用が工夫され、活用されることを待っているとも思われる。

以下、標準語とも比較しながら、盛岡弁の具体的な姿を紹介してみたい。なお、ここでいう盛岡弁とは、昭和三十年代の半ばごろに話されていた盛岡弁で、今では記憶の中の言葉、もしくは一部の人々（六十代、七十代以上の、互いに親しい人々が集まった時に）が語っている「伝統的な方言」である。地域としては中津川、北上川に挟まれた盛岡城を中心とする旧盛岡市内の他に、仙北町、米内、厨川、太田など、後の盛岡市に併合した近郊（かつて「在」と呼ばれた地域）を含み、必要に応じて両者を区別した。いずれも広い意味では南部弁といつてよく、近郊の言葉はその大部分が八戸市や三戸郡、十和田市のような青森県の南部地方の方言とも重なっている。

三、盛岡弁における人の呼び方

(1) 一人称

標準語では自分を指す言葉（一人称）として、「私」「僕」「おれ」「あたし」など、性差や世代、話す相手や場面などによって（なかば無意識のうちに）使い分けている。たとえば、改まったフォーマルな場面では、一般に「わたくし」や「わたし」を使い、親しい友人同士で話す時は男性は「僕」とか「おれ」を使い、女性は「わたし」「あたし」などと言う。

盛岡弁では、男女とも一番多く使われる一人称は「おれ」と「おら」である。標準語の影響を受けて「わだす」ということもあるが、これはまれで、相当改まった言い方である。（標準語化が進んでいる現在のことではなく、昭和三十年代以前のことである）。「おれ」は男性が多く使う傾向があるが、絶対的なものではなく、女性もよく使う。また、目の前でも、自分を指す時「おれ」「おら」を使い、標準語のような相手による使い分けがない。

一人称の「僕」という言葉は、盛岡弁では決して使わない。小学校の時、都会から転校してきた子供が「ぼくは……」と言ったところ「ボクって、そつてら（僕って言ってる）」と笑いにされたという記憶をもっている人もいる。「僕」は明治になって使われるようになった学生言葉で、そういう言葉を聞くと鼻持ちならないと感じるのである。

標準語では「おれ」「おら」を使うのは男性である。そのため盛岡に来た時、女性が、「おら」とか「おれ」と言うので驚く、という話をよく耳にする。しかし、これらの言葉は盛岡弁では男言葉でないし、聞く方も、乱暴な言葉だと感じるわけではない。「おれ」「おら」に対する感じ方が違うということである。

一人称の複数は「おらど」「おらだづ」と言う。「ど」は「ども」の縮約形で「ども」は「私ども」「手前ども」のように謙遜した表現である。「だづ」は「たち（達）」の発音が変化したものである。「おらほ」と言

うと、私の方、私の所などということでは「おらほのは（自分達の方）」というように言い方もなされる。また「おらえ」は私の家、「おらどご」は私の所、「おら、はー」は、私はもう……、ということ、「おれさ」は私に、「おれさも」は私にも、「おれさもす」は私にもね、ということ、「おれ」「おら」はこのように他の語と結びついてよく用いられる。「おれ」は、上代においては下位の者に対して用いた二人称を指す言葉（お前）であったが、中世以降（特に近世以降）貴賤男女を問わず、目上にも、目下にも、一人称として用いるようになった。

一方「おら」は、本来、卑しい男性の使用する語であったが、江戸時代においては「おれ」「おいら」と共に江戸町人の女性が用いたという。語源からみれば「おれ」も「おら」も「おのれ」の変化した語である。（『大言海』による）。日常よく使われる言葉ほど変化しやすい。「おのれ」も、そうした言葉の一つで、それぞれの地域において、口頭語として繰返し使われているうちに「おれ」「おら」と変化していったものである。盛岡弁の場合、係助詞の「は」(ha)は、格助詞の「が」(ga)と同様、その子音が消えて母音の「e」だけ軽く残って、「おのれは」は「おれあ」「おらあ」のように変化しやすかったものと考えられる。

(2) 二人称

標準語では「そちら」「お宅」「あなた」「君」「お前」など一人称以上に二人称は相手や場面に応じて細かな（微妙な）使い分けがある。相手との距離が大きければ「そちら」「お宅」を使う。親しい間柄では「君」や「あなた」を使う。目下に対しては「お前」を使う。（ただし「お前」はほとんど男性しか使わない言葉である。）総じて日本語において英語の you にあたる「あなた」や「君」は、親しい間柄でないといくく、できるだけ「先生」とか、相手の名前の下に「さん」をつけて呼ぼうとする。あるいは「そちら」「お宅」などという尊敬語を使うという傾向が強い。

盛岡弁で改まった最も丁寧な二人称は「あなたださんす」「おたくさんす」

「あなださん」「おたくさん」などという言葉である。「す」は人名、また人を表わす名詞の下について尊敬や親愛の気持ちをこめた言葉で、盛岡弁の特徴的な表現といってもよい。これは、江戸中期に上方の遊廓で使い始め、通人の間で流行した言葉だといわれる。盛岡の人の中には（町方、近郊の人を問わず）、今でも「旦那さん」「おめさんす」のように下にこの「す」をつけないと落ち着かないという人もいる。

次に丁寧な二人称は、「おめえさんす」「おめえさん」である。目下や同等の人に対しては「おめえはんす」「おめえはん」を使う。「はん」は「さん」が変化したもので、柔らかで親しみのある言葉である。それだけに改まった場面、目上の人には使えない、幾分甘えた響きがある。

「おめえ」という言葉を使うのは男性が多い。「おめえ」は、言うまでもなく「おまえ」の変化したもので「omae」の「ae」という二重母音が単母音「e」になったものである。複数の時には「おめえだづ」とか「おめえど」と言う。

盛岡市近郊では二人称を指す言葉として「んな」「うな」と言う言葉もある。これを「うな」と表記している本（辞書）もあるが「んま（馬）」「んめ（梅）」「んめえ（うまい）」と同様、「う」ではなく、鼻音の「ん」で発音されることが多い。「んな」「うな」は多くの場合、男性が子供達を相手にする時や、又親しい仲間が集まった時に使う。「んな」「うな」はもともと、「うぬ」の変化した言葉で、「うぬは」と係助詞は「は」がついた形から「うなあ」のように変化したものであろう。この「うな」は青森県の南部地方では「えが」「んが」に変化している。

複数（二人称）の「君達」という時は「んなあど」「んなあだづ」と言う。

(3) 敬称

方言は、うち解けた地域社会の、仲間うちの言葉である。相手に対する気遣いや遠慮はかえって「水くさい」ものとされる。従って敬称の「くさま」とか「くさん」をつけず、姓や名前をそのまま使う傾向が強

い（特に男性の場合）。

もちろん、敬称を使わないということではなく、親疎関係を反映して使うことも、使わないこともある。敬称を使う時は、「松坂さん」とか「高橋さん」のように名字には「さん」を付けることが多い。また、名前の下には「ともちゃん」「たかちゃん」などと「ちゃん」を付けることが多い。それによって、うちとけた親しい気持ちを表現している。「ちゃん」は女性に多く使われる。男性は一般に「さん」を使い、「ちゃん」付けで呼ぶのは相当親しい間柄である。人気があって一種のあだ名のように多くの人から「ちゃん」付けで呼ばれる人もいる。

語源的に考えるとすべて「さま」であり、「さま」の発音が変化して「さん」や「ちゃん」になったものである。変化したということはフォーマルな形が崩れていくということであり、そういう言葉がうちとけた親しい間柄で使われる。

(4) 親族名称

親族名称は、標準語では「とうさん」「かあさん」が多く、現代では「パパ」「ママ」も多く使われている。夫婦同士の呼び方として古い世代では「あなた」「お前」と呼ぶ関係から、若い世代では子供が生まれてからも互いの名を呼びあうようになってきているという指摘もある。

盛岡弁では「父さん」と呼びかける時は、「おどさん」「おどー」「とっちゃん」などと言う。「ごで」というのは「御亭主」ということで「ごで」（くには姓が入る）のように言う。また「母さん」と呼びかける時には「おがさん」「おかあ」「かっちゃん」「あっぱ」「かが」「ぢゃぢゃ」などと言う。

親族名称はそれぞれの家庭の職業や教養、経済的な豊かさなどを総合した、その家庭の雰囲気や反映して、同じ盛岡といってもずいぶん違いがある。その違いは現代でもあるが、戦前の社会の方が著しく、それだけ多様な表現がみられた。現代ではこうした違いが薄れ、この面でも共通語化が進みつつある。（繰り返し言うが、ここに取り上げる親族名称

は昭和三十年代の半ば以前の盛岡弁であり、今では少数派となりつつある「古い」盛岡弁である。

親族名称を決める上で大きな役割を担っていたのは姑の存在である。かつては姑は嫁の教育者として言葉や作法をしつけ、その家の「家風」を守っていこうとした。また、一般に教養のある家庭では標準語に近い言葉でしつけていた。学校教育を通じて共通語化が推し進められ、伝統的な親族名称が失われていくこともあった。

夫が自分の妻をいう時は「おらほのおかだ」と言う。妻が夫を言う時は「おらほのとっちゃん」「おらほの、おどー」などと言う。「おかだ」は「御方」で貴人の妻を指す敬語である。「おかだ」に対してつり合いのとれる言葉は「ごで」であろうが、そうした敬語を使わないのが面白い。「おらほのおかだ」という言い方は、親しみをこめて軽く揶揄するような心理があるものと推察される。

祖父母は「じさま」「ばさま」「じっちゃん」「ばっちゃん」「じ」「ば」などと呼ばれ、舅・姑は「しゅうどおやじ」「しゅうどかか」などと呼ばれる。「おずさん」「おばさん」(それぞれ「ず」「ば」にアクセントがあり、これで「おじいさん」「おばあさん」という意味になる)もよく使われる。伯父・叔父は「おんちゃん」「おんちゃ」「おんつあん」「おじさん」「(「さ」にアクセントがある)と言ひ、伯母・叔母は「おばさん」「(「さ」にアクセントがある)「おばちゃん」などと言う。つまり「おじいさん」か「おじさん」かは同じ「おじさん」という言葉のアクセントによって区別されている。「おばあさん」「おばさん」も同じである。

長男は「えなさま」「えなさん」「えな」と呼ばれ、その長男がまだ子供の場合「えなこさん」とも呼ばれる。

それに対して二男以下の男子は「おんちゃま」「おんちゃ」「おんつあん」と呼ばれ、「おんづかす」(末の男の子)とか「おづきれ」(二男以下の男子)、「なげおんづ」(同)などという卑称もあった。

これらの言葉は長男と二男以下の男子の差別が強かったことを物語る

ている。戦前の「家」制度において家督を相続する長男が大切にされ、二男以下の存在は、軽視された。これについて、どの子もわが子として均しくかわいいと思つたという声もあるが、長男を重んじる考え、態度を露骨に表わしていたという声も聞くことがある。長男の嫁は「あによめ」(「兄嫁」)、二男以下の嫁は「おんじよめ」(「おじよめ」の訛り)と長男と二男以下の差別にまで及んだ。新しい憲法によってこうした差別は撤廃され、これらの言葉も死語となった。

語源の上から考察してみると、長男を指す言葉「えな」は「あに(兄)」の発音が変化したものと思われる。また「おんづ」は、「おじ」の変化した言葉である。「おじ」という時「お」と「じ」の間に撥音の「ん」が入り込む現象は、たとえば「まだ(窓)」を「まんど」、「はだ(膚)」を「はんだ」と言うのと同じである。(ただしこの撥音は軽く発音され「まんど」「はんだ」と表記した方がいい場合もある)。「おんちゃま」「おんちゃ」は、この「おんず」に「さま」が付いて、それが変化したものである。

子供は赤ん坊は「びつき」(蛙を指す言葉で、まだ立てない、四つんばいの赤ん坊の姿を蛙に見立てた)とか「あがんぼ」と呼ばれる。少し成長すると「わらす」と呼ばれ、性を区別して言う時は「おどごわらす」(男の子)「おなごわらす」(女の子)と呼ばれる。「がぎ」(餓鬼)は卑称である。「おどごわらす」は青年になると「あんこ」(「兄こ」の変化した言葉。兄さんの意)とか「わけもの」(「若者」の訛り)「わけしゅ」(「若い衆」の訛り)と呼ばれた。

女性は年頃の娘になると「あねっこ」と呼ばれる。(盛岡弁に「あねっこ使う」と言う言い方がある。これは人に愛想をふりまく、こびる、ということである)。結婚すると「あねさん」と呼ばれる。(時には娘時代のまま「あねっこ」と呼ばれることもある)。

四、盛岡弁の敬語表現

(1) ごぞんす・がんす・あんす (丁寧体)

①書き言葉の文体には、「だ」体、「である」体、「です」「ます」体がある。このうち「です」「ます」体は読み手を意識した敬体とされ、「だ」体「である」体は読み手を意識しない(もちろん全く意識しないということはありえない。読み手に対する敬意ということを意識しないだけの話である)文体とされる。

書き言葉の文体はもともと会話から生まれたもので、会話には常体の「だ」体、敬体の「です」「ます」体、さらに莊重体の「ございませす」体がある。会話の場合、直接聞き手が目の前にいるから、その聞き手との関係やその場面に応じて、これらの文末表現が選ばれる。どういう文末表現を選ぶかは、一人称をどういう形で表現するか(わたくし、おれ、ほく、など)ということとも深く結びついて、その会話の基本を形造るものである。

盛岡弁の会話では「だ」体、「ませす」体、「がんす」体、「あんす」体、「ごぞんす」体などが用いられる。親しい間柄では「だ」体が用いられ、また男性が多く使う傾向がある。「だ」体はうちとけた言葉だという反面、乱暴な印象を与えることもある。

「ごぞんす」は、もともと遊里で使われていた言葉とされており、「ござります」(「あり」の丁寧語)が変化したものである。この「ごぞんす」が変化して「がんす」となる。「ごぞんす」は女性が多く使い「がんす」は男性が多く使う傾向がある。

「あんす」も、もともと遊里語で「あります」の変化した言葉とされている。丁寧な順に並べてみると「ごぞんすーがんすーあんすーだ」となる。

②でござんす・でがんす・であんす・ませす・だ(断定の種々相) 標準語の「そうだ」という断定表現は、次のような言い方がある。(以下、例文としては、敬体、常体をあわせて紹介しておく)

ア、そでござんす(そうでございます)
イ、そでがんす(そうです)
ウ、そでやんす(そうです)
エ、そだませす(そうだ)

オ、そだ・んだ(そうだ)

注1 「そうだ」の「そう」は「ほん」と歯茎音⁶が声門音になったり、「ん」鼻音になったりする。また「そう」と長音で言うことは少なく、「そ」と短音になることが多い。「そう」↓「そ」↓「ほん」↓「ん」と変化し、もとの形に近い程、丁寧な言い方である。

注2 「ませす」は盛岡でも周辺の在の方で多く使われる。

注3 アーオの言葉の後に、軽く念を押し相手に働きかける助詞として「よ」(上品)「てあ」「であ」(普通)が付くことも多い。

③動詞や形容詞を丁寧形で表現する時は、「ごぞんす」「がんす」「あんす」を使う。

ア、行きあんす(行きます)
イ、遊びあんす(遊びます)

ウ、おもしえごぞんす(面白うございます)

エ、おもしえがんす(面白いです)

オ、たががんす、たげがんす(高いです)

カ、おもしえ(面白い)・たげえ(高い)

「ごぞんす」は「有る」の丁寧な表現で、形容詞の下に付くことができる。しかし、動詞の下に付くことはできない。

(2) おである、おであんす(いらっしゃる)

標準語の「いらっしゃる」は「居る」「在る」「来る」「行く」の尊敬語で、「いらせらる」の変化した言葉である。補助動詞として「読んでいらっしゃる」「笑っていらっしゃる」のように「して、いらっしゃる」と

いう形で用いられることもある。

盛岡弁で、この「いらっしやる」にあたる言葉が「おである」「おであるす」である。「おである」は「おいである」の、「おであるす」は「おいであるす」の「い」が脱落して縮約した形で、それぞれ「あ」も短く、弱く発音されることが多く、「おである」「おであるす」と表記されたりする。

「おいでなさい」とか「おいでになる」のように「おいで」は標準語でも「出る」「行く」「来る」「居る」などの尊敬語として用いられている。「おであるす」は「おいでになりあす」の縮約形である。

家にいるかどうかを尋ねる表現として盛岡弁では次のような言い方がある。

- ア、えに、おでありあすたが（家にいらっしやいますか）
- イ、えに、おであるすが（同）
- ウ、えに、おであるが（同）
- エ、えさ、おりあすたが（家にいましたか）
- オ、えさ、おりあすか（家にいますか）
- カ、えさ、いだすか（家にいるか）
- キ、えさ、いだすかであ（家にいるかよ）
- ク、えさ、いだが（家にいるか）
- ケ、えさ、いるが（同）

注1 場所を示す格助詞は一般には「さ」である。しかし丁寧ないうと標準語の影響を受けて「に」となる。

注2 カ、キに用いられている「す」は、「飲むす」「寝るす」「書ぐす」のように、軽く敬意をこめて使われる助動詞である。語史的には江戸特有の語でもあり、その名残りと考えられる。

注3 オの「おる」は、標準語では謙譲語でへりくだる意味合いが強く、相手に対しては使いにくいのが、盛岡弁では「いる」の丁寧形として用いられている。

注4 ア、イ、エ、カ、キ、クのように現在いるかどうか尋ねる

時も「た」という過去形を用いることが多い。標準語でも「いらっしやいましたか」と過去形で言うこともあるが、盛岡弁のほうが過去形を用いることが多いようである。「た」はもともと完了（存続）の助動詞「たり」の「り」が脱落したもので、語源としては「てあり」だといわれている。従って「いた」という過去の事実を示すことにより「〜ている」と存続していることを示すのが本来で、その使い方が残っているともいえよう。

(3) おくある（尊敬表現）

標準語では「お止めになる」「お寄りになる」「お書きになる」のように「おくなる」の形で尊敬表現を作るが、盛岡弁では「おくある」の形で尊敬表現を作る。上記の例は「おやめある」「およれある」「おかざある」となる。(2)の例でも示した「おである」も、もともとはこの「おくある」の形で「おいである」の「い」が脱落した尊敬表現である。

(4) 食事を勧める言い方（勧誘形）

食事を勧める表現は、どこの地域でも一種の挨拶言葉のようにパターン化した表現がある。盛岡弁の場合、次のような言い方がある。

- ア、おあがつてくなんしえ（召し上がって下さい）
- イ、おあがれんしえ（同）
- ウ、おあげんしえ（同）
- エ、おあげあ（食べなさい）
- オ、たべるむしえ（食べてみて、食べて）
- カ、くむしえ（同）
- キ、け（食べろ）

注1 アの「おあがつてくなんしえ」の「おあがつて」は「おあがりあつて」の縮約形である。敬語は一般に、どうしても表現が冗漫に長くなりがちで、縮約形にして使うことも多い。

その分、敬意は薄れる。

注2 イの「おあがれんしえ」は「おあがりあつてくなんしえ」の縮約形である。

注3 オ、カの「むしえ」は「て、むしえ」の形で用いられ、「て、みしえ」「て、もしえ」と表記されたりもする。これは「見され」が「見さい」に変化した言葉で、「て、みなさい」「て、ごらんみなさい」と勧めることからきている。たとえば、「みるみしえ」(見ておきなさい)「くるみしえ」(来てみなさい)「とつてみしえ」(取つてみなさい)のように、ちよつとやつてみたらどうかと軽く勧めるのである。

注4 キの「け」は「くえkue」の二重母音²⁶が単母音²⁷に縮約した言葉で、きわめて乱暴な命令形で、わが子に対して言つたり、本当に親しい間柄で使う言葉である。

(5) 中に入ることを勧める(勧誘形)
 来客があつた時、「どうぞ中に」と勧める表現も、しばしば用いられる。盛岡弁では「入る²⁸haiu」は二重母音²⁹が単母音³⁰になつて「へえ」という。これを使つたたとえば次のような言い方がなされる。

ア、おへれつて、くなんしえ(お入りになつて下さい)
 イ、おへあれあんしえ(同)
 ウ、おへれあ(お入り)
 オ、へらつしえ(同)

注1 アの「おへれつて」は「おへありあつて」の縮約、ウの「おへれあ」は「おへありあれ」の縮約で「おへあり」が、ここにも使われている。

注2 アの「くなんしえ」は「ください」の変化した言葉で「さい」は「しえ」とか「せ」に変わる。また「だ」はその音が³¹という歯茎有声音から歯茎鼻音の³²になり、「な」に変化している。

注3 ウの「おへれあ」は「おへりあれ」、オの「へらつしえ」は「へりあんしえ」の縮約した表現である。

(6) 「て、くなんしえ」(勧誘形・依頼形)

人に物事を勧める時、標準語では丁寧な言い方として「て、下さい」を用いる。「下さい」は、もともと「下され」で「くれる」の尊敬表現の命令形である。命令形とはいふものの、尊敬表現になつてゐることから、その意味としては相手に事を勧める勧誘、あるいは依頼といつてよい。以下、盛岡弁でよく使われる「て、くなんしえ」の例を挙げておく。

ア、おもぢえつて、くなんしえ(お持ちになつて下さい)
 イ、おめしあつて、くなんしえ(お召しになつて下さい)
 ウ、おやすめつて、くなんしえ(お休みになつて下さい)
 エ、おいしえつて、くなんしえ(お許しになつて下さい)
 オ、おみせつて、くなんしえ(お見せになつて下さい)
 カ、おかしえぎあつて、くなんしえ(働いて下さい)
 キ、おぐれつて、くなんしえ(寄こして下さい)
 ク、おづつみあつて、くなんしえ(お包み下さい)

注1 いずれも「おへある」の形を使つた尊敬表現が上に来て、その下に「くなんしえ」(下さい)という勧誘・依頼の形が付いたものである。

注2 アからケまでの上の部分の動詞の原形はア「持つ」イ「召す」ウ「休む」エ「許す」オ「見せる」カ「かせぐ」キ「くれる」ク「包む」である。

(7) みさる(「する」の尊敬語)

盛岡弁では「する」の尊敬語「なさる」にあたる言葉が「みさる」である。これは古語の「めす」が方言として残つたものである。(古語としては「飲む」「食う」「着る」の尊敬語として多く使われ、今でも「召し上る」「おめしになる」などという形で残つてゐる)「みさる」は「めさる」とも発音される。「みさるな」「めさるな」と言つと、なさるな、と

いうことである。

ア、そういうごど、みさつてらっけなす(そういうことを、なさつていたということです)

イ、なにに、みさんすすか(何になさいますか)

ウ、みさりあんす(なさいます)

エ、みさりあんせ(なさいませ)

オ、みさんす(なさいます)

カ、みせあ(なさい)

(8) そわる・おそわる(「言う」の尊敬語)

盛岡弁では「言う」ことを「そう」という。「そういう」が縮約して一語になった言葉で、本来は「そのように言う」という意味だったと考えられる。この「そう」は近郊の在では「へう」となり、県北や青森県の南部地方では「へる」と変化している。「いう」の尊敬語は「そわる」で、これは「そういわれる」の縮約して出来た動詞であろう。これにさらに「お」をつけて「おそわる」と言うこともある。

ア、おそわつて、くなんしえ(おっしゃつて下さい)

イ、そわつて、くなんしえ(同)

ウ、そつて、くなんしえ(同)

エ、そつてける、へつてける(言つてくれ)

オ、そえ、へろ(言え)

盛岡弁の早口言葉に「そえばそつたつて、そつたつてそわれるし、そわねばそわねつて、そわねつてそわれる。ほんにそつたらいもんだべが、そわねばいもんだべが」という言葉がある。同じことを近郊では「へればへつたつて、へつたつてへらえるし、へねばへねつて、へねつてへらえる、ほんに、へつたらいもんだべが、へねばいもんだべが」と言う。

注 エの「ける」は「ける」の命令形。「ける」は「くれる kureru」

の「の」音が弱くなって消え(一般に弾音の「は」は消失しやすい)

残った「e」という二重母音が単音の「え」になって「ける」となっ

た。「くなんしえ」という尊敬表現に対し「ける」は敬意をこめない言い方である。

(9) ごろうじる(「見る」の尊敬語)

盛岡弁には「見る」の尊敬語として「ごろうじる」がある。これは古語の「御覧す」が残ったものである。

ア、よぐごろうじでおぐれ(よく御覧になって下さい)

イ、よぐみで、おぐれつてくなんしえ(同)

ウ、よぐみでや(よく見て下さい)

エ、よぐみでや(よく見てよ)

オ、よぐみるみしえ(よく見なさい)

カ、よぐみる(よく見ろ)

(10) おひなる(「起きる」の尊敬語)

盛岡の古くからの商家や武家の言葉として「おひなる」がある。「お昼になる」の「る」が撥音化して、「おひんなる」となり、その「ん」が発音されなくなったものである。お昼になる、ということ暗に目が覚めることを意味したもので、上品で奥床しい言葉とされる。

ア、おひなりあんすたえが(お起きになられたのでしょうか)

イ、おひなりあんしえ(おめざめになって下さい)

ウ、おひなんしえ(起きて下さい)

エ、おぎでくなんしえ(起きて下さい)

オ、おぎだけで(起きてくれ)

カ、おぎで(起きて)

キ、おぎろ(起きろ)

(11) およる(「寝る」の尊敬語)

「おひなる」の反対語で「夜」を動詞化して「およる」とした言葉で、お休みになる、寝るの尊敬語である。やはり商家や古くからの商家の言葉である。

- ア、およれったすか（お休みになりましたか）
 イ、およつてあんす（お休みになっています）
 ウ、およれあんす（おやすみになっています）
 エ、おやすめある（お休みになる）
 オ、おやすめんしえ（お休みになって下さい）
 カ、おやすめつてあんしたのすか（お休みになっていたのですか）
 (12) くて、おぐれあ（「くて、おぐれ」と依頼する）

「くて、くなんしえ」と同様、相手に依頼する表現として「くて、おぐれ」がある。これは女性語で、甘えた響きがある。

- ア、これたべでおぐれあ（食べておぐれ）
 イ、これ見でおぐれあ（見ておぐれ）

- (13) そもす（「そう申す」という意味の丁寧語）

「申す」は本来謙讓語であるがこれを丁寧語として使って「くと、そう言います」ということを次のように言う。

- ア、そもすあんす（そう申し上げます）
 イ、そもさんす（そう申します）

- (14) たもれ（「たまわれ」の変化した言葉）

相手に対して「くて、下さい」と丁寧な頼む表現である。古語の「たまはる」（下さる）が、その命令形だけ、依頼の表現として残ったものである。

- ア、きてたもれ（来て下さい）
 イ、たべでたもれ（食べて下さい）

（受付 二〇〇五年一〇月二四日）